

ファインディング・ファンタスティック・ファンデーション

2025年2月28日(金) ~ 2025年4月5日(土) 13:00 - 19:00

* 日・月・火・祝日は休廊

* 3月14日(金)は「GAIEN-NISHI ART WEEKEND2025」のため20:00まで開廊。

SNOW Contemporary / 東京都港区西麻布2-13-12 早野ビル404

出品作家: 木村萌、多田恋一郎、谷口洸、中根唯、山田悠太郎、雨宮庸介

デザイン: 山田悠太郎

企画: ストレンジャーによろしく実行委員会

ファインディング・ファンタスティック・ファンデーション

まず下地(ファンデーション)が絵画の完成イメージに与える影響を紹介したい。オランダの代表的な画家フィンセント・ファン・ゴッホは下地の研究にも熱心だった。彼は染料系の顔料を好み、単に白色の下地に絵を描くのではなくコチニール染めとして染色にも用いられたカーマインレッドを混ぜ込んでいる。時間とともにそれは次第に上部の絵具に混ざり込み画面に統一感をもたらした。一見極彩色に見える彼の画面の妙な統一感は、全ての絵具に混ざり込んでいる染料系の顔料がもたらしているのだ。良い絵画にはえてしてそういった微妙なさじ加減の妙が下地から始まっているのだ。

一方近年はSNS、特にインスタグラムの影響で絵画にも変化が起きた。作品が全体として良くも悪くも、あっさりとして分かりやすくなったのだ。これは作品が1080×1080ピクセルの画面の中で最も美しく見えるように描かれるからだと考えられる。そのせいで前後の層の色の重なりによる見かけの混色や、カメラレンズでは捉えきれない微妙な濃淡の表現が忌避されるようになってしまった。これは美術作品のインスタント化であって、昔気質の作家たちにとってはただただ苦しい時代なのだ。

日本人は食にうるさい民族である。そして彼らは本物の味は手間ひまかけなければ得られないと知っている。例えば醤油は大量生産品であれば3カ月でできるとされるが、伝統的な天然醸造だと2年かかるそうだ。どちらも見た目は同じで、塩加減も大きく変わらないだろう。しかしながら新鮮な刺身を味わうとき、天然醸造で作られたそれにつけて食べるところを想像してみるとどうだろうか。うっすらあった魚の臭みは消え、麴の香りが鼻をくすぐり、舌の奥ではコクが感じられるはずだ。やはり本物は美味しいのだ。本展の展示作家もそんな醤油をつくる伝統的な職人と同じ魂を持っている。本当の良さのためにはまわり道など惜しまない。本展は舌の肥えた日本人たちに、今こそ目も肥えてもらおうというのである。

ファインディング・ファンタスティック・ファンデーション。良い下地や画材を見つけることが、素晴らしい絵画の扉を開くのだ。ぜひとも彼らのイメージの奥にある旨みを味わって欲しい。

ストレンジャーによろしく実行委員会

谷口洸

「画布」

木村萌

展示空間と影響し合う絵画の在り方を模索する中で、画布に透ける生地の利用を始め、現在まで絹や混紡生地など、様々な布を用いて制作を行ってきた。

近年では、継続してエジプト綿100%のオーガンジー生地を使用している。平織りの綿布に加工を施したものが綿オーガンジーであるが、薄く透明度が高く、つやのある硬い風合いと、糸むらが滑らかな肌触りが特徴である。特にエジプト綿は、他の綿に比べて繊維が長くつやがあり、より丈夫で細い糸を作りやすい。

この生地は絵の具との相性も良く、絹ほど質感が均一にならずに、キャンバスに描いた時のような幅のある表現ができるのが魅力だ。描く際には筆で何度も表面を撫でることになるが、繊維の毛羽立ちが少ないため、絵の具が乾いた時に白っぽく濁った色にならず、期待の発色が得られる。

また、描画には水性の絵の具を用い、染めるような仕事も多い。化学繊維の場合、透け感や生地自体の美しさは十分だが、水分を含みにくく絵の具がうまく定着しなかったり、滲みなどのコントロールが難しいものも多い。

壁に落ちる影が透けて見えるくらいの透明感と、描かれた絵が見えるくらいの織り目の密度で、描画にも問題なく応えられる丈夫さを兼ね備えた、私にとって最適な生地だと言えるだろう。

「大トロ」

多田恋一郎

この一年、人間関係周りで色々なことがあり、人間不信気味になり、他者の瞳をまともに見ることも描くこともできなくなった。今年の冬、そこそこ具象的に描いたポートレートに油をぶちまけ、そのイメージがドロドロに溶けている様を見て何とも言えない安心感を得た。そこで俺の中の[他者]の価値や定義が半壊していることを理解した。

ただ、ドロドロと溶け続け、壊れていくだけでは困る。壊れそうになっても踏みとどまる、生きようとする力が必要だと考えた。この一年間は垂れ続ける絵の具をその場に留めるために、吸水性の高い下地材を徹底的に研究した。イメージに向かおうとする筆致や半壊していく垂れに意識を集中させるために、布目の見えないフラットな絵肌にこだわった。

今回の作品に使用した支持体はかなり吸水性が高く、一度描き始めたら3時間程度で絵の具が動かなくなる。それは貴方に会いたいと思ってから、会えないことを悟ってしまうまでの時間。描画時間の何倍もの時間をかけて作られた支持体は、熱情の大トロの部分を取り除くための[まな板]のようなものだ。感情を出し切り、画面のどこに手を入れていいかわからなくなった後、休憩がてらタバコを吸ってるうちに絵の具はカピカピに乾いてしまう。もう少し触れることができたかもしれない…と思っても、絵の方から拒絶されるのでもう触れることはできない。

それでもまあ、いいかと思う。スタジオに向かう途中で買ったホットコーヒー同様、会いたい気持ちも冷めてる。

「自作パネル」 谷口洸

僕の下地はパネルを作るところから始まる。まずパネルの木枠部分には杉LVLを使用している。LVLとはLaminated Veneer Lumberの略で、単板積層材とも呼ばれる集成材や合板の仲間だ。このLVLのメリットは木材の乾燥による反り・割れの変化が起きにくい点にある。更には原材料として間伐材などの未利用材を使うことが多く、環境にも優しい。また実用性や環境配慮以外にも、パネル側面にLVL独特の層になった模様が出来上がるのも気に入っている点の一つだ。

杉LVL木枠を組み上げた後、今度はそこに突板合板を貼り付けパネルにする。突板合板というのは、天然木を紙のように薄くスライスした素材をラワン合板に貼り付けたものだ。これもLVLと同様に木材の乾燥による劣化に強い。また一本の木材から大量に生産できるため木材の有効活用にもつながっている。パネル表面の樹種は、今回はチョウジザクラ(丁字桜)を使用している。この桜は日本のサクラ属の野生種のひとつで、木材として利用する際には木の中心に近い部分の赤身(あかみ)と、樹皮側に近く成長部位の白太(しらた)との対比が際立っていて美しい。また他の桜材にも言えることだが、肌触りは滑らかで心地が良い。

一般的な製材に比べて変形に強く、環境にも優しい杉LVLと突板合板で作成されたパネルが、僕の絵画の美しさの基礎となっている。

「支持体」 中根唯

普段から立体的な支持体を作り、その表面に絵を描くという制作を続けている。作品によってその制作方法や素材は様々だが、今回展示しているシリーズは主にスタイロフォームでかたちをつくり、石粉粘土で表面を仕上げている。まず土台となる板をカットし、板の表面にスタイロフォームを接着する。接着できたら電熱線やカッター、やすりなどを使用して削りながらかたちを作っていく。支持体のかたちは大まかなイメージを頭に浮かべながら作ってはいるが、そのイメージに忠実に作るというよりは、手の動きや表面の凹凸に従って自然と滑らかになるように削り、かたちづくることを心がけている。かたちができあがったら、寒冷紗(化学繊維で織られた荒目の布)をアクリルメディウムで表面に貼り付けて目止め(スタイロフォームの細かい気泡を埋め、表面の強度を上げる)したあと、石粉粘土を貼り付けていく。乾いた石粉粘土をやすり、磨いていくと、きめの細かい滑らかな下地となる。磨きこむことで表面の微細な穴や凹凸が減り、絵具の水分を吸いづらくなるのだが、それによって絵具の色が少しずつ薄く乗っていくことにもなり、細かい毛並みを描画をするのにはちょうど良くなる。自分にとって、絵はなるべく薄い方がしっくりくる。

「支持体を收拾する」 山田悠太郎

生活やフィールドワークの中で、潰れた缶、朽ちた木材、コンクリート片などをはじめとした多様な不用品を收拾し、それらを支持体として絵画の制作を行う。自宅近くの甲州街道を中心に、日常的に支持体の收拾を続けている。私の出身地である北海道の路上にはゴミが少ない。冬には一面の雪が降り積もり、除雪車が走行して雪を移動させる。道路環境がひと冬毎にリセットされるためか、街路も比較的綺麗に保たれている。大学進学で上京した際、東京の人口密度に比例した路上ゴミの量や、冬に雪が降らないことで引き続きゴミがそこに存在し続けるという事実には驚いた。街路樹や植栽の根元には朽ちた看板やコンクリート片が転がり、道路脇では車に潰されてぺしゃんこになった空き缶が目に残る。古びた家の前に積まれた生活の破片のような物体は静かに時を重ねている。風が強い日には特に多くの、お酒の缶やペットボトル、弁当箱などが転がる。こういった光景はとても新鮮であり、日常の断片を描く絵画制作と並行して、都市の中でゴミや不用品を收拾していた。やがてそれらは支持体になり、表面に描くモチーフ・画材・描き方の選択にも作用していった。路上で集めた支持体に、その素材から立ち上がる風景を投影し、描き出すことを目指している。

「Aの下地」 雨宮庸介

「絵画を中心に興味深い活動をしている若い人たちの、下地についての展覧会に参加しませんか？」とギャラリストから誘われ、年代差と画家ではない事実に、むず痒いままに参加させてもらっています。出品する林檎彫刻は平均36層の下地塗りを施します。地塗り材を一度塗っては紙ヤスリがけを繰り返しています。明度値だけでいえば10回もぬれば、ほぼ完全な「白」になります。しかし林檎の「赤」はカラーチャート的に言えば彩度の低い赤茶のような色であることが多いので、層ごとに発生する光の反射による「輝度」をあげて、彩度の低い色を置くことを可能にする。これが林檎彫刻における「下地」の意味です。具体的な効果については実際に見ていただくのがよいと思いますが、有用無用の別なく、ある種の単純作業である下地塗りをしているあいだに頭に飛来してくることのいくつかは「数ミクロンの色の被膜の下に大きな白い反射がある、これは果物の林檎も同じ」「ドップラー効果によるディレイは少し赤方偏移するらしい」「創世記で食べられたのはAppleの原意である「果物」という意味であって、現在僕たちが思っているようなセイヨウリンゴではない」「にもかかわらず約600年前に発明された油彩の進歩と林檎はあまりに相性が良かった」「なにより日本にArtという新しい概念が輸入されて美術と訳されたのとApple＝セイヨウリンゴが林檎と訳されたのがほぼ同じタイミングである」